

今週のみこたとば

「この人を見よ」

(ヘブル人への手紙 12章 1節～6節)

「信仰の創始者であり、完成者であるイエスから目を離さないでいなさい」(12:2)

仲森文穩

### 今日のメッセージ要旨

○競技場のトラックを選手たちがゴール目指して駆け抜けていく。汗を流し、腕を振って、懸命に駆けていきます。転んでもすぐ起き上がって、また走り出していく。それは、私たちの姿です。周りで応援しているのは、信仰の先達たちです。私たちは、主にある交わりを築いてきた今は亡き懐かしい信仰の先達たちを忘れはしません。そして今日の箇所には、彼らもまた私たちを思いやり、雲のように取り巻いて私たちを応援しているとあります。このヘブル人への手紙は迫害の時代に書かれました。キリスト者の誰もが、孤独を感じる時代でした。

イエス様は「わたしはあなたがたを捨てて孤児にはしません」と約束しておられます。この約束だけでも十分心強いのに、更に多くの先達たちも、信仰の道を完走できるよう私たちを応援してくれているというのです。なんと嬉しく、心強いことでしょう。

○日本のキリスト教は世界でも類のない厳しい迫害を350年にわたって経験しました。今日、信教の自由があり、平穏な日々を送れるのは実に幸いなことです。けれど、平和に慣れすぎると、信仰が幸せの探求、心の平安を目的とするという風になりやすい。かつて、旧約の預言者アモスが「御言葉の飢饉」を訴えたことを思い起こします。彼も順調な時こそ魂の飢え渴きを失いやすい、と警戒したのです。

難しいことをする必要はありません。なすべきことは12:2に記されています。そこに「信仰の創始者であり、完成者であるイエスから目を離さないでいなさい」と、あります。イエス様から目を離さないでいなさい、と勧めるのであります。

○なぜなら、イエス様ほど緊張感をもって罪の問題と戦われた方はいないからです。マルクスかイエス様か、迷った青年がいました。もしマルクスのいう搾取のないユートピア社会が来ても人間の罪がそれを破壊する。青年はこう判断し、イエス様に従いました。罪は神様の御心に逆らう思いですが、4節には「あなたがたはまだ罪と戦って血を流すまで抵抗したことがない」とあります。でも、イエス様は罪に対して目覚め、徹底的に抵抗されました。

このあと歌う新聖歌99番は、由木康牧師が作詩しました。彼は「人間の中には本物の愛がない」と悩み、それを罪のなせるわざと自覚しました。そんな彼がイエス様の中に希望の光を見たのです。「イエス様の生きざまには、少しの混じり気もない純粋な愛が表されている」。

彼はその思いを詩にしたためました。「この人を見よ」と歌うこの讚美歌は、十字架のキリストへの思いにあふれ、今日私たちが誰を見つめて歩むべきか、明快に教えています。私たちもこの主を見つめ、終わりの日まで気をゆるめず、信仰に目覚めて歩んでいきたいと思えます。